

シリーズ 筑前木屋瀬宿 神仏めぐり

第七回 須賀神社 参籠殿

木屋瀬宿の文化の中心的存在である、筑前木屋瀬須賀神社の境内にある建物、参籠殿を訪ねて見ました。鳥居を一礼してぐり参拝の作法に従い手水舎で手を清め境内に入りました。私は神社仏閣を訪ねると、西行の歌を思い出します。

「なにごとの おわしますとは知らねども かつげなさに ぼながる」

境内から何か不思議な力が湧いてくる感じがします。

須賀神社の神殿に向って右側に建つ建物に参籠殿です。正面に参籠殿と書かれた額が掛かり瓦葺の斜線が美しい平入り入母屋造りの神館です。参籠殿とは神事に先立って神職などが潔斎のために参籠する建物です。この建物は、明治二十二年木屋瀬の船頭さんが寄贈したもので、百余名の方々の名前が記載された奉納額が今も参籠殿に掲げられています。今では、そんなに大勢の船頭さんが木屋瀬にいたとは想像できないことですが、明治末期の記録によると船運業者は一四六戸、船頭六五四人とあります。



社殿に向って右側に位置する参籠殿の内部の様子

参籠殿には江戸時代に奉納されていたいろいろな絵を奉納するようになりまし。その後絵師が描いた馬や一流の絵師による絵馬も多数あります。木屋瀬出身の画家、新谷鐵傳が描いた絵馬や、木屋瀬改盛町三塩屋の麻生東谷が描いた「木屋瀬宿之図」、大正七年に堀尾水田画伯が模写し奉納された絵馬や祇園山笠の絵馬など貴重な文化財的絵馬が多数あります。また、木屋瀬の伝統文化ともいえるべき、厄払いの儀式に参列された方々の氏名が記された額も奉納されています。

参籠殿は、祇園祭、恵比須、子供頭行事や氏子総代会等、木屋瀬の人々が何かにつけて集う場所でもあります。明治四十年の大火の際には、焼け出された町民が共同生活をした場所でもあります。須賀神社は木屋瀬の産土神社として木屋瀬に生活する人々にとって切っても切り離せない場所であり、その中心がこの参籠殿です。平成十二年には屋根瓦が葺き替えられ修復されました。木屋瀬の先祖の人達が残してくれた素晴らしい文化遺産、参籠殿を後世の人達にぜひ引き継ぎたいものです。

つばくろやお伊勢参りの お礼絵馬
本町 野口靖彦

“能”何...それ!?でも面白かったよ。楽しかったよ。

3月5日(日)午前中には「こやのせ座」にて、日本の歴史・文化に対する理解を深めてもらおうと「親子お能教室」が行われました。参加した小・中学生は実際に笛や鼓を演奏したり、舞台での仕草をしたり、体験を通じて改めて能の魅力を学んでいるようでした。午後からは、「こやのせ座」3月恒例行事、第4回「こやのせ座・能」が開催されました。

今回は竹生島(琵琶湖に浮かぶ島での物語)が上演されました。初めての方や子供にも解りやすい様、現代語訳本が配布され、森本哲郎氏(観世流能楽師)の解説が行われました。参加者(およそ大人120名、子供30名)は日本古来の古典芸能を堪能しているようでした。



初めて鼓を体験して感動する子供たち

こやのせ座運営部会 八尋弘文

扇天満宮祭 学神祭

こころにのこるもの

五月の風が吹き荒れる28日、運動会当日でしたが、19名の幼きころが天満宮に集い、16時より神事が執り行われました。道真公の心を拝聴し、記念品の拝受、タイムカプセル、植樹式と未来に向けてこころが高揚する幼子達。明日の木屋瀬を垣間見る様でした。

19時よりの天満宮例祭、直会には役員総代の方々、町内の皆様、多数の参加を頂き盛大なる祭典となりました。

木屋瀬の伝統と文化を受け継がれた事に感謝いたします。関係者の皆様には大変御苦勞をおかけ致しました。

心よりお礼申し上げます。

当番町新地町 麻生太一郎

ハッスル♪ 第五回 木屋瀬芸術祭

今回の内容は、前夜祭を兼ねた二日の夜のダンスパーティー。三日の「大内義昭とアンジェリコンス」のライブコンサートには地元の子供会やサッカークラブほか八幡西区長が参加してサッカ

自然と人々

木屋瀬宿駅には駅馬が十頭いた。この馬々が、木屋瀬大川「遠賀川」の流れに遊び大空に向かっていた。この喜びをいなさ上げていた。この馬の主任者は藤二郎さんであったが、一日中赤ふんどし一つの裸であったので「藤二郎さんの赤ふんどし」と親しまれていた。この人が木屋瀬宿駅の最後の駅馬守であった。美人の湯として知られている奥津温泉では川の中の露天湯のそばで、教人の女達がリズムに乗って踊りのように足踏洗濯を見せている。これも、お客を誘う目玉とか。

木屋瀬大川でも足踏洗濯は見ていた。洗濯板や石の平面を利用して洗濯している人もあった。染め上げた布や絵画もあつた。町の女達は何かとこの美しく澄んだ木屋瀬大川の流れを利用して流れと歌い、それぞれの仕事を楽しんでた。こうした女性達と砂浜や犬走りの草々と遊ぶ子供達とで、見はるから眺めはおおらかに美しかった。これを母なる川として木屋瀬美人もすくすくと育っていた。けれどこの川は彦山川、嘉麻川、大鳴川の流れを集めているので、雨期の洪水は珍しくはなかった。出水の度に久保崎天神様の石段



わたしの昔話

を一段又一段と呑み、水かさを上げる大河よ荒れないでと祈る思いで人々は水位の増減を見つめていた。

安政五年の大降雨に遠賀川は大洪水となり感田地区の堤防下に設けられていた水門が今にも崩壊しそうになり近傍の人々が大勢集まり必死に防禦作業に当たっていた。これを見た木屋瀬町部の人、瓜生長作氏は勇躍防禦作業に加わり奮って危険に身を投じられた。

然し何と不幸にも誤って水勢に吸着され底に亡くされたのである。実に悲しむべき大惨事であった。この尊い犠牲によって広範囲の人畜や家財や田畑が救われたのである。当時の堤防上に一身を殺して以て仁となす瓜生氏の名を永遠に伝へん」と長文の記念碑が建立されている。ただ有難いかなである。合掌。

但し現在の堤防は大きく重厚であり内陸水の排水溝も完備されていて、忘れた頃に何が来ても大丈夫の安心感がある。

新時代は大自然と共和し共存し、全てのものを力強く守っている。

オーラム)では 五年後の筑前六宿開通四百年に向けて飛躍の一步を踏み出しました。

続く午後の部の後半 第五回記念シンポジウム「メタルカラーの時代・鉄の都は甦る」では、北九州マイスター四名が熱心で「まちづくり」を語るなど「未来に向けての町づくり」の為の討論と学術的内容の充実したプログラムで終日を過ごしました。

最終日 五日の筑前郷土芸能連絡会議(ジョイント・イン・こやのせ座)で盛會を極め、筑前木屋瀬宿場まつり」と連携した行事として限り無き今後の発展性が期待されます。

又 恒例の「町並みスケッチ大会」や「バザー」史料館の「木屋瀬好昔写真展」の他、梅本家にて三好重香・長野真屋に於いては真砂三軒の各アーティスト作品の展示販売、更に「筑前木馬茶目氣一輪」が「江戸あかりの民藝館」の「蟲干し展」・須賀神社境内にて「季節の味覚のうとん接待処」・「阿部王樹忌吟行会」のほか「こやのせ座」で「抹茶席」を行い、更に伊馬春部記念館でも「せんざい接待」が初協賛して行われるなど着実に進展度が窺える芸術祭となりました。

最後に、まだまだ知名度も低く集客力も少ない木屋瀬芸術祭ですが、木屋瀬の歴史と文化を活かした本物指向の継続性を信条とする他に類無き自主企画・自主運営に誇りを持ち、此れからも活動を展開していく所存が御座いますれば、地域の方々にも依り広くご参画・ご協力戴きます事を心から願ひ、ご報告の挨拶と致します。

こやのせ座運営部会長 柴田泰助



最終日の様子

”市指定文化財”短見 「板絵着色木屋瀬宿図絵馬」

須賀神社の参籠殿に掛かっている「木屋瀬宿図」は、大正七年十月、当時新町の梅本昌雄氏方に假寓していた岡山県の画家・堀尾水田氏が梅本氏の囀りに依り、麻生東谷画の「板絵着色木屋瀬宿図絵馬」を模写したものである。

平成十二年三月、北九州市から「有形民俗文化財」指定をされている東谷の絵馬は、それまで改盛町の護国院という天台宗寺院の境内に収められていた。落款・印章等がないので作者については断定できないが、地元の画家で北九州・筑豊に多くの絵馬を残しているの、地元では麻生東谷と確信している。

制作(奉納)時期についても、嘉永五(一八五二)年、安政元(一八五四)年、安政年間、文久二(一八六二)年と四説あるが、文久二年に竣工した西元寺本堂の屋根が「平入り」でなく「妻入り」であるので、文久二年を下限とすることができると見られる。この間十年の開きがあるが、江戸末期の絵馬の画風と相違するものではないとされている。

昭和十二年六月に発見された裏板の「吸付機」(縦53・6cm横3・7cm厚さ1・6cm)で「嘉永五年丑ノ六月吉中改

護国院は香月の白岩山聖福寺の末寺として創建され、火災病難にあらたかたで、現在は、平成十二年三月に改盛町絵馬保存会から寄贈を受けて、文化財として収蔵している。

縦59・4cm、一枚板であるが、宿駅施設や社寺や瓦葺き商家等町並み、それに往来する人々が描かれており、江戸末期の木屋瀬宿の様子がよく現わされており、交通史の史料として優れた価値を持つとともに、宿駅を描いた数少ない絵馬としても貴重である。

史料館では、開館当初、現物を正面に展示していたが、現在では拡大写真を掛けて、地元画家の文化財を誇りにしているのがある。

木屋瀬みちの郷土史料保存会 会長 水上 裕



板絵着色木屋瀬宿図絵馬 (市指定文化財)